

～突撃★ドメーヌ最新情報！！～

◆VCN°12 ピエール=オリヴィエ・ボノーム

生産地方：ロワール

新着ワイン2種類♪

VdF クラ 蔵 2020 (白)

2020年は、豊作に恵まれた当たり年！品質面でも、ボノーム自身非常に満足に行く、全てのバランスが整ったワインに仕上がったとのこと！2020年は、春の遅霜がなく日照量にも恵まれたことで、ブドウの成長スピードが早かった。また、ボノーム曰く、2020年はコロナの影響で自身の海外出張や訪問客のアテンドなどが減ったことから、畑仕事に完全に専念することのできたスペシャルな年とのこと。出来上がったワインは、トゥーレーヌらしいフレッシュでピチピチとしたみずみずしさにあふれている！それでいて、よくよく味わうとダシのような塩気のある旨味と骨格がしっかりと感じられ、ボノームが当たり年と自信をもって言うのも十分納得の行く素晴らしいワインに仕上がっている！今回は旨味を最大限に残すためにフィルターは一切を掛けていない。そのため、ワインをグラスに注ぐとプリムールらしい澱の濁りがうっすら残る。開けたてガスとは少し還元が残っているので、気になる方はカラフをすることをおススメ♪

VdF クラ 蔵 2020 (赤)

2020年は、日照量に恵まれ、ブドウがかつてないほど早く熟した当たり年だった！特に、カベルネフランなどの晩熟品種が、ガメイなどの早熟品種と同じタイミングに完熟するような珍しい現象が起こった年だった。ボノーム曰く、「カベルネフランの収穫が9月2日」とこんなに早く収穫したのは初めてであるが、収穫したブドウの潜在アルコール度数はすでに13%もあったそうだ！出来上がったワインは、野趣味溢れる果実味の中に滑らかな艶やかさがあり、キュートな酸とキメの細かいタンニンが味わいにメリハリを与える！ボノームはプリムールなので5年以内に飲んでほしいと言うが、正直ワインは滑らかでありながら、10年は優に持ちこたえられそうなマテリアルがぎっしりと詰まっている！酸化防止のためにわざと少しガスを残しているため、気になる方はカラフをすることをおススメ♪

ミレジム情報 当主オリヴィエ・ボノームのコメント

2020年は、ブドウが早熟で収量にも恵まれた当たり年！冬のスタートは暖冬で雨が多かった。3月半ばに5月中旬並みの暖かさが続き、ブドウは一齐に芽吹いた。4月に0℃前後まで下がる寒波が降り、シェール側のピノノワールの一部に霜の被害があったが、ほとんどのブドウは影響がなかった。開花は例年よりも3週間ほど早く、ソーヴィニヨンの中には5月下旬に終わるものもあった。また、病気においては、6月まで適度に雨が合ったことで、一部オイディオムが蔓延したが、散布を適時に行ったことで繁殖をうまく抑えることができた。ブドウの成長の勢いは止まらず、6月終わりの時点で早期収穫、そして豊作が予想された。7月に入るとぱったり雨が止み猛暑と日照りが続いた。8月は猛暑がいったん落ち着くが、畑は若干水不足の傾向にあった。だが、収穫直前の8月20日に20mm前後の雨が降り、この恵みの雨によりブドウは一気に潤いを取り戻し、最終的に多くのブドウを豊作で締めくくることができた！

「ヨシ」のつ・ぶ・や・き

今年の4月初めと5月初めの2回に渡り甚大な霜の被害に遭ったボノーム…2021年は、いきなり初っ端から出鼻をくじかれたかたちでのスタートを余儀なくされている。



写真①ソーヴィニヨンの畑の霜対策に使用した藁束

これはボノームのソーヴィニヨンの畑の写真。(写真①)
手前に見える藁束は、4月初めの霜対策の時に使用したものだ。この藁束は、燃やすことにより畑のまわりの空気を暖めるとい効果もあるが、それよりもスモークを焚くことにより地表の放射冷却を防ぐことが主な目的だ。残念ながら、4月6日、7日、8日の早朝3日間に渡り、気温がマイナス5℃から7℃まで下がったため、この藁束を焚く効果も空しくすでに芽の出た主芽はほぼ全滅だった。彼曰く、気温がマイナス5℃以下となると、霜対策で扇風機を回したりロウソクや藁束の火を焚いてもほとんど意味がないそうだ。だが、幸い1回目の霜は時期が早かったため、まだ芽吹いていない主芽の蕾や副芽が半分以上残っていて、それらは辛うじて霜の被害を免れることができた。むしろボノームにとっての悪夢は、5月初めに降りた2回目の霜だった。

これは2回目の霜に当たった直後のボノームのソーヴィニヨンの写真。(写真②) 緑の葉がバゲットの付け根にほんの少し見えるだけで、あとはほとんどが霜でやられているのが分かる。ちなみに、この写真は霜の被害があった5月3日の3日後の5月6日に撮影したもので、通常5月のこの時期は、新梢がもうすでに15cmくらい伸びて畑が緑に染まって見えるのが普通だが、遠くを見渡しても緑の新梢がほとんど見られない。どうやら1回目の霜を免れた芽もほぼ全て5月の霜にやられ荒野と化したようだ。



写真②霜の被害に遭ったソーヴィニヨン



写真③霜の被害から免れたソーヴィニヨンの植樹

そして、これは今年植樹したソーヴィニヨンの写真。(写真③) この苗木も同じ畑で撮影したものだが、こちらはまわりがカバーで覆われていることで中に熱がこもり放射冷却を免れることができた。苗木を見ても分かるように、実際5月の霜は4月の1回目に比べて軽かった。ボノーム曰く、5月の霜は気温がマイナス1℃前後の軽いもので、対策により防ぐことができた霜だったとのこと。ただ、前日の天気予報が霜の予報を打たなかったため、誰もが対策を怠り、大きな被害につながってしまった…。彼の見立てでは、自社畑は4月の霜により50%減、そして5月の霜で90%~100%減と予想。一方、買いブドウの被害状況はこれから確認するとのことだ。天気予報が前日に警告を打っ

ていれば、50%のブドウは救えたかと思うと、本当に結果が悔やまれる今回の霜の被害。今年のトゥーレーヌは厳しい年となりそうだ…。

(2021.5.6.ドメーヌ突撃訪問より)

※弊社HP「フォト・ギャラリー」より、カラーでサイズの大きい鮮明な写真をぜひご覧くださいませ